

続・珈琲の思い出

僕が優子と初めて会ったのは、駅前の小さな本屋の中だった。小さい子ども向けの絵本のおはなし会を開催する、と聞いて、2歳の息子の佑樹を連れていった時だった。

土曜日の昼下がり、店内に10組ほどの親子連れが集まり、絵本の読み語りを聴くというものだが、その時の絵本の読み手が優子だった。

軽やかなショートヘアに、少しぼつちやりしたほっぺたがかわいらしい女性だったが、何よりも印象的だったのは、優子の声だった。鈴を転がすような声とはこのような声を言うのか、と納得するほど、彼女の透明感のある美しく、優しい声に魅了された。

また、時折、ページを繰るたびに見せる、本への愛情あふれるまなざしや、絵本を愛おしむように、胸に抱く姿は、見ているだけで癒された。当然、僕だけでなく、息子の佑樹も、おはなし会に参加している子どもたちも、優子のおはなしに聞き入っているようだった。

それからというもの、毎月第4土曜日が来るたびに、僕は佑樹を連れておはなし会に通った。それが、息子を楽しませたい、という気持ちよりも、優子に会いたい一心からだということに気づくのに、たいして時間はかからなかった。